

日本語・日本事情教育部門

1. 日本語研修コース及び日本語研修特別コース
2. 短期留学プログラム日本語コース
3. 全学向け日本語コース
4. 日本語能力試験対策講座
5. 共通教育科目・日本語日本事情科目
6. 福井大学博士人材キャリア開発支援センター

1. 日本語研修コース及び日本語研修特別コース

《全体概要》

2012年度、日本語研修コースでは、教員研修留学生3名を受け入れた。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語力と、研究を行う上で必要な基礎的な日本語の習得である。文型・文法10コマ（1コマ90分）を基本として、漢字、作文、情報処理、文化、修了発表指導の各技能クラスがある。コース最後の修了発表会で、学生はスライドを使って日本語によるスピーチを行う。修了発表の各受講者のスピーチのテーマは以下の通りである。

1. ルーマニアの学校を知っていますか ネアゴエ・クリナ・ガブリエラ（ルーマニア）
2. ミャンマーの教育 オマー・リン・シュウ（ミャンマー）
3. わたしのくに Timor-Leste と わたしのがっこう Kay-Rala

ジャスイントゥ・ソアレス・ダ・シルヴァ（東ティモール）

学生の日本語の既習歴と学習意欲を考慮し、午前中の授業を次のように変更した。

1限：3名とも「日本語（文型・文法）」受講

2限：1名は「日本語（文型・文法）」受講、2名は全学日本語コース「日本語Ⅱ」受講

また、2012年度から日本語（会話）は日本語（補講）に変更された。受講生の状況に合わせて、補講したり修了発表のための練習を行ったりするなど、自由に使える時間が必要だからである。その結果、2012年度の時間割は以下のとおりである。

《時間割表》

	月	火	水	木	金
1	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
2	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ
3	日本語 (情報処理)	日本語 (作文)	日本語 (漢字)	日本語 (補講)	日本語 (修了発表指導)
4			日本語 (文化)		

以下に各クラスの概要をまとめる。

《日本語（文型・文法）》

【受講者】 1限：3名、2限：1名 【授業時間】 10コマ/週 総コマ数：134コマ

【担当教員】 桑原陽子（コーディネータ）、澤崎幸江、敷田紀子

1) 目標

留学生生活を送る上で必要な基礎的な日本語を習得する。(『みんなの日本語初級』第1～25課)

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 1限目のみ、全学日本語コース「日本語Ⅰ」と合同である。1限は『みんなの日本語初級』に添って学習し、原則として2日(4コマ)で1課を終了した。1限の学習内容については、全学日本語コース「日本語Ⅰ」を参照のこと。
- ・ 2限目は語彙クイズと復習が中心である。後半は、修了発表の練習を中心に文型の復習をした。

(2) 成績・評価

中間テスト(15%)と期末テスト(85%)で、最終成績60点以上を合格とする。合格者は、来期、全学日本語コース日本語Ⅱを、不合格の者は、同コース日本語Ⅰを受講する。

3) 評価と課題

- ・ 全学日本語コースとの合同授業では、活発な練習活動が実施できた。
 - ・ 修了発表の練習をしながら、文法と語彙の復習を行ったのは効果的であった。
- なお、2限の「日本語Ⅱ」については、全学日本語コース「日本語Ⅱ」を参照のこと。

(桑原陽子)

《日本語(情報処理)》

【受講者】3名 【授業時間】1コマ/週 総コマ数:13コマ 【担当教員】桑原陽子

1) 目標

Microsoft word と power point の基本的な使い方を学び、修了発表の資料を作成する。

2) 方法

情報処理センターの端末を使用し、Microsoft word と power point の使い方を学習した。教材は、担当教員作成のプリントである。修了発表資料を評価対象とした。

3) 評価と課題

学習者に基本的な PC 操作の知識があったため、スムーズに学習が進められた。(桑原陽子)

《日本語(作文)》

【受講者】3名(非漢字圏3名 ミャンマー、ルーマニア、東ティモール各1名)

【授業時間】1コマ/週 総コマ数:14コマ 【担当教員】今尾ゆき子

1) 教科書および授業の目標

- ・ ハンドアウト(単文作成問題、モデル文、関連語彙等)
- ・ 5つの課題を設定し、課題作文をもとに修了発表のためのレポートを作成する。

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 授業の始めに修了発表のテーマを大まかに決めて、課題作文の集大成が修了発表および修了レポート作成となるように、5つの課題を設定した。
- ・ 修了レポートは冬休み前迄の10回で作成することを目標とし、5回目迄は主として表の作成、6回～9回で文型・文法の授業において導入済みの既習文法・語彙を用いた文章作成を行った。
- ・ モデル文を参考に課題作文の作成とワープロ打ちを宿題とした。
- ・ メール送付されたワープロ打ちの課題作文を添削。次回の授業で各自作成した文章を読んで、内容把握と表現や誤字の修正を行った。
- ・ 第10回目(冬休み直前)に、5つの課題作文をまとめて修了レポートを作成し、1月から個別指導。
- ・ 課題作文 1. 自己紹介
2. わたしの学校(1)(2)
3. 学校の行事
4. わたしのしごと(1)(2)
5. わたしの国・わたしの町

(2) 成績・評価

課題作文(50%) + 修了レポート(50%)

3) 評価と課題

- ・ 出席は3名とも皆出席。
- ・ 学生の日本語レベルが、中級、初中級、ゼロ初級とそれぞれ異なっていたため、課題提示は共通のまま、文章作成は初回から個別指導の体制をとった。文型・文法クラスの導入項目に関係なく、5回までの授業は単語だけを記載する表の作成を中心に行った。作成した表をもとに、説明文の作成という形をとった。
- ・ 5つの課題作文の書式設定が同一でなかったため、ひとつのレポートにまとめた際、文字サイズ、行間、字体(フォント)を統一するのに時間を要した。また、行間、図の挿入位置や2頁にわたる表の調整については修正が難しいようだった。今後は、最初に書式設定の統一を徹底することが望まれる。(今尾ゆき子)

《日本語(漢字)》

【受講者】3名(非漢字圏3名)

【授業時間】1コマ/週 総コマ数:13コマ 【担当教員】山中和樹

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級I 漢字 英語版』を使用して、漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット1～11の122漢字、180漢字語を習得する。

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 原則として1コマ1ユニットで進んだ。ただし、最初の1コマで漢字の識別、成り立ち、ベーシックストロークについて学習した。2コマ目から10～14字ずつ漢字を学習した。
- ・ 授業では、漢字の成り立ちから説明し、テキストの漢字の読み・書き練習を行ったが、画数の多い漢字はもっぱら読みの練習を行った。

(2) 復習クイズ

- ・ 毎回、漢字フラッシュカードを使用し、学習済みの漢字の読みを繰り返し復習した。その直後に、各ユニットの復習クイズを実施した。主に文中における漢字語の読みをひらがなで書き、当該漢字語の英訳をさせる問題を出題したが、数と数に関連する語の漢字の書き問題も出題した。

(3) 成績・評価

- ・ 毎回のクイズ(20%) + 期末テスト(80%)をもとに総合的に評価した。

3) 評価と課題

- ・ 参加学生3名はすべて非漢字圏であったが、うち2名は来日前に日本語学習の経験があり、漢字もすでにいくらか習得済みであった。また、新しい漢字にも興味を持ち、積極的に漢字学習に取り組んだ。

残りの1名は、日本語学習の経験がなく、漢字はもとより、ひらがな・カタカナの学習から始めた。カタカナの習得もおぼつかない状態で、当初はとても漢字どころではない状態だった。そのため、この学生に進度をあわせざるを得ず、ユニット9までで終了した。

他の2名の学生は自主的に漢字の学習を進めたので、実際には複式クラスの状態であった。

(山中和樹)

《日本語（文化）》

【受講者】 3名（ミャンマー、ルーマニア、東ティモール各1名）

【授業時間】 1コマ/週 全13コマ

【担当教員】 膽吹覚（コーディネータ）、摩騰富子（華道）、柳原智子（陶芸）、長村敬子（書道）

1) 目標

華道、陶芸、書道について、福井県在住の指導者から直接に指導を受けて体験学習することによって、日本の伝統文化に対する理解を深める。

2) 授業内容

(ア) 華道（池坊）：7コマ

『池坊自由花入門カリキュラム』を参照しながら自由花に取り組んだ。

(イ) 陶芸（越前焼）：3コマ

第1回と第2回は陶芸の道具の使い方など、陶芸の基礎を学んだ上で、中皿と湯飲み茶碗を制作した。第3回は花器とランプの制作に取り組んだ。

(ウ) 書道（3コマ）

第1回は平仮名、第2回は片仮名、第3回は書初めに取り組んだ。

3) 評価と課題

成績は出席状況と各講師からのご意見を総合してコーディネーターが判定した。受講生はおおむね意欲的に取り組んでいたようである。今回より華道と書道の講師が一新した。その一方で茶道を開講することができなかった。これは主催者である愛宕坂茶道美術館の都合によるもので、次年度も開講の予定はないという。茶道については受講生のニーズもあるので、今後の検討課題としたい。
(膽吹覚)

《コース全体についての課題》

本年度は、既習歴のある学生がおり、さらに非常に学習意欲が高く習得が速い学生がいたことから、日本語Ⅰと日本語Ⅱを並行して受講するという初めての試みを行った。結果として、日本語研修コースの学生全員が、非常に学習効果を高めることができたと思う。このクラスの変更には、「日本語（補講）」の時間が役に立った。今年の試みは、既習歴のある学生への対応の成功事例として、今後に生かしたい。
(桑原陽子)

*2012年度は、日本語研修特別コースは開講されなかった。

2. 短期留学プログラム日本語コース

《概要》

このコースは、福井大学と交流協定を締結している大学等から受け入れている短期留学プログラムAコースの学生が共通科目として受講する日本語コースで、日本語・日本事情系科目10単位、伝統産業系科目2単位が必修である。

2012年前期は、2011年度に受け入れた留学生19名が日本語科目（「日本語初中級1」「日本語初中級2」「日本語中級」「日本語上級」、「はじめての作文」「はじめての会話」）および日本事情科目（「日本事情2」「日本の文化」「応用日本語2」）を受講した。

2012年後期は、2012年度に受け入れた留学生19名が日本語科目（「日本語初級1」「日本語初級2」「日本語初級3」「日本語中級」）、日本事情科目（「応用日本語1」）および「伝統産業1」を受講した。

① 2012年前期

《科目一覧》

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初中級1	桑原陽子、市村葉子 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	8
日本語初中級2	膽吹覚、酢谷尚子 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	4
日本語中級(日本語A)	山中和樹		0
日本語中級(日本語C)	桑原陽子		0
日本語上級(日本語E)	今尾ゆき子	『日本語上級読解』、プリント	1
日本語上級(日本語G)	膽吹覚	プリント	1
はじめての漢字	今尾ゆき子	『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字 英語版』	1
はじめての作文	山中和樹	『みんなの日本語初級やさしい作文』	3
はじめての会話	山中和樹	『みんなの日本語初級Ⅱ』	6
日本事情2	膽吹覚		0
日本の文化	膽吹覚		0
応用日本語2	山中和樹	プリント	1
多文化コミュニケーション2	山中和樹		0
多文化コミュニケーション3	桑原陽子		0
伝統産業2	中島清		0

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限		日本事情2		日本の文化	
		多文化コミュニケーション3		多文化コミュニケーション2	
2限	日本語初中級2	日本語初中級2	日本語初中級2	日本語初中級2	
	応用日本語2				
3限		はじめての漢字	はじめての作文	はじめての会話	
		日本語中級(C)			
		日本語上級(G)			
4限	日本語初中級1	日本語初中級1	日本語初中級1	日本語初中級1	
		日本語中級(A)			
		日本語上級(E)			

《受講者数》

科目	国名	中	イ	ア	合
	国	国	ン	メ	計
			ド	リ	
			ネ	カ	
			シ	合	
			ア	衆	
			メ	国	
			リ		
			カ		
			合		
			衆		
			国		
日本語初中級1		7	1	0	8
日本語初中級2		4	0	0	4
日本語中級(日本語A/日本語C)		0	0	0	0
日本語上級(日本語E/日本語G)		0	0	1	1
はじめての漢字		0	1	0	1
はじめての作文		3	0	0	3
はじめての会話		6	0	0	6
日本事情2		0	0	0	0
日本の文化		0	0	0	0
応用日本語2		0	0	1	1
多文化コミュニケーション2		0	0	0	0

科目	国名	中	インド	ア	合
		国	ネ	メ	計
多文化コミュニケーション3		0	0	0	0
伝統産業2		0	0	0	0
小計		20	2	2	24

《授業報告》

1. 日本語初中級1

- ・ 受講生：8名（中国7名、インドネシア1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：59コマ
- ・ 担当教員：桑原陽子*、酢谷尚子、市村葉子（*コーディネーター）

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』31課～50課を終了。初級の基本的な文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 教科書『みんなの日本語初級』の取り扱い

- ・ 2日で1課終了。「書いて覚える句型練習帳」等の補助教材も積極的に使用した。

(2) 教科書以外の活動：

- ・ 毎日、その日にくじでテーマを決めてそれについて自由に話す「おしゃべりタイム」を設けた。毎回学生1人が会話のまとめ役を担当し、話題を提供したり、学習者間の質疑を促したりしながら、3分程度の自由会話をを行った。終了後、その日まとめ役だった学生は、そのテーマについて短い作文を書くことにした。
- ・ できるだけ、長くまとまった文を書く活動を取り入れ、文の接続の練習を行った。

(3) 成績評価

- ・ 文法復習テスト（筆記）2回（20%分）＋修了テスト（26～48課）（80%分）

3) 評価

- ・ 全員授業態度は非常に良好であった。
- ・ 長いまとまった文を書かせたところ、複文をうまく作れないことがわかったので、できるだけ1つのテーマでまとまった長さの文を書く練習を取り入れた。この練習は今後、教材を充実させたい。
(桑原陽子)

2. 日本語初中級2

- ・ 受講者：4名（中国4名）

- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：61コマ
- ・ 担当教員：膽吹覚*、市村葉子、長原尚子、村上洋子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）
『みんなの日本語初級Ⅱ文法解説』（同上）
- ・ 初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習する。
- ・ 日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

2) 方法

(1) 授業方法

前年度の進度を踏まえて、第31課から開始した。2コマで1課のペースで進めた。授業は文型の導入と定着を中心とした。具体的には語彙を導入した後で、練習A・B・Cを行った。理解の困難な文型については『書いて覚える文型練習帳』を用いて、その理解と定着を図った。会話はこのクラスではしなかったが、毎回1人ずつ1分間スピーチを担当させて、会話能力の向上を図った。宿題は教科書の課ごとに問題の部分を課した。また、毎週水曜日の授業では教科書を離れて、受講生の自発的な日本語運用力の向上に努めた。

(2) 小テスト

L31-35、36-40、41-45の計3回実施した。

(3) 成績および評価

期末試験(80%)、小テスト(20%)の配分で判断した。

3) 評価と課題

- ・ 期末試験の結果を見る限り、受講生全員が当初の授業目標を到達したといえるだろう。
- ・ 受講生の性格もあったと思われるが、全体的に自発的な発話が少なく、教員もそれを十分に支援することができなかった。今後こうしたクラスの活性化を検討していきたい。

(胆吹覚)

3. 日本語中級（日本語A）

本科目の受講者なし。

4. 日本語中級（日本語C）

本科目の受講者なし。

5. 日本語上級（日本語E）

- ・ 受講者：1名（米国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）、プリント
- ・ 目標：さまざまなテーマの文章を読んで要約することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

2) 方法

- ・ 1課につき1コマのペースで課題文を読み、単語の意味や指示語の指示内容を確認し、文章の構成と内容の把握を行った。2コマ目に「内容の問題」「言葉の問題」を解くことにより文章が理解できたかどうかを確認した。
- ・ 課毎にテキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成のクイズ（5問）を10回実施。また、課題文について感想等の文章作成(160字程度)を宿題として10回課し、添削の後返却した。
- ・ 成績評価：レポート(50%)、期末試験(50%)

3) 評価と課題

- ・ 課題提出に関しては、全宿題(10回)を提出。欠席した日のクイズも後日提出。授業態度は良好。
- ・ 中級レベルで渡日してくる短期プログラムの学生は「日本語中級」を修了後、ほとんどが「日本語上級」を受講する。この科目は共通教育科目「日本語(上級)」と合同授業で、学部生の他にN1～N2レベルの交換留学生、日本語・日本文化研修生が受講するため、非漢字圏の短期プログラム生にとってはかなり大変である。今期も、非漢字圏の受講者が読解・作文中心の授業についていくのは困難と予想されたが、なんとか修了した。(今尾ゆき子)

6. 日本語上級1（日本語G）

- ・ 受講者：1名（米国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『朝日新聞』（朝刊・日曜版）「Be」掲載「ビトイーン」
- ・ 日本語上級レベルの留学生を対象として、日本語の読解力・表現力の向上を図る。

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 新聞から1つの記事を選定し、それを①読解、②スピーチ（2コマ）、③作文の計4コマにわたって授業した。使用した記事は「秋入学に賛成ですか」、「初恋の人に会いたいですか」、「親孝行していますか」、「SNSを使っていますか」の4つである。

(2) 成績および評価

- ・ 期末試験（100%）

3) 評価と課題

- ・ 受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限り、当初の授業目

標は達成できたと判断してよいであろう。秋入学や SNS など受講生の興味をひく教材が功を奏したのかもしれない。

- ・ 受講生の日本語能力の差、具体的には短期留学の中国人留学生（N1合格）と学部生（N2程度）との差が大きく、前者がクラスの80%を占める現状では、どうしても前者に合わせた授業にならざるをえない。後者への配慮・指導は留意した積りであるが、今後とも更なる支援を考える必要があるだろう。（膽吹覚）

7. はじめての漢字

- ・ 受講者：1名（インドネシア1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語初級 I 漢字 英語版』
- ・ 漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット1～11の122漢字を習得。

2) 方法

(1) 漢字導入

原則として1コマ1ユニットで進んだ。最初の1コマ（1週目）で、ひらがなとカタカナの定着度を確認した後、漢字の成り立ちと基本的な筆順を導入した。2コマ目から漢字を導入し、第3コマ目からディクテーションを実施した。次回学習項目の予習プリントを配付し、授業ではテキストの練習問題を行うとともに、毎回、読み・書きクイズとディクテーションを行うことにより、漢字の定着を図った。また、適時、作文を課した。

(2) 復習クイズ

毎回、当該ユニットの復習クイズ（漢字の読みクイズと書きクイズ）とテキスト巻末のクイズを実施した。学生が提出した答案は、その場で採点して誤答を指摘し学生に修正させる方法をとった。

(3) 成績・評価

中間テスト(40%)、期末テスト(60%)とし、総合的に判断した。

3) 評価と課題

受講者は非漢字圏の学生で漢字学習歴はゼロであったが、漢字の習得への意欲がきわめて強かった。今期（2011年度）に受け入れた初級レベルの学生のうち唯一非漢字圏の学生で、クラスの中で自分一人だけ漢字の読み書きができないことが漢字学習への大きなモチベーションとなっていた。熱心に漢字学習に取り組み、習得状況もきわめて良好で、当初の目標より1ユニット多い12ユニット（132漢字）まで進んだ。今回の受講者は漢字学習に余力があったので、参考冊“Kanji Reference Booklet”を使って未習の漢字語や読みも導入した結果、漢字の語彙力も大幅に向上した。（今尾ゆき子）

8. はじめての作文

- ・ 受講者：3名（中国3名）
 - ・ 授業時間：1コマ／週 総コマ数：15コマ
 - ・ 担当教員：山中和樹
- 1) 教科書及び授業の目標
- ・ 教科書『みんなの日本語初級 やさしい作文』
 - ・ 初級の語彙や文法を使って、さまざまなテーマで作文する。
- 2) 方法
- (1) 授業方法
- ・ まず、モデル文を読み、内容を把握し、随時、文法・語彙について説明する。次に作文のポイントに進み、練習問題をする。最後に、作文する。授業時間内にできないときは宿題とし、次回に提出させる。
 - ・ 下書きしたものをチェックし、添削したうえで、清書させる。
 - ・ 自分の作文を読み、他のメンバーに紹介し、その内容について、質疑応答する
 - ・ 原則として、1コマ1ユニットで進んだが、最初のユニットは易しいので1コマ2ユニットで進んだ。各課はモデル文の内容解説、教科書の練習問題、「作文メモ」、「書きましょう」（実際の作文）からなっている。
- (2) 成績評価
- ・ 課題作文提出状況と出席状況・授業態度より総合的に評価した。
- 3) 評価と課題
- ・ 出席・授業態度とも大変良好であった。 (山中和樹)

9. はじめての会話

- ・ 受講者：6名（中国6名）
 - ・ 授業時間：1コマ／週 総コマ数：15コマ
 - ・ 担当教員：山中和樹
- 1) 教科書及び授業の目標
- ・ 教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』
 - ・ 指導教員との会話、学外での会話において、自分、趣味、専門などについて話せるように表現や語彙を習得する。
- 2) 方法
- (1) 授業方法
- 教科書の各課の会話のビデオをまず見て、内容を理解する。次に教科書を見て内容を確認する。次に、各課で扱われている文法項目を含む文を、教科書を見ないで、言えるようにする。それから、その課の教授項目の表現を使用して、指導教員や他の学生と自由な会話の練習をする。最後に、ビデオを見て、ビデオの内容について教師が質問し、学生がそれに答える練習をする。

初めに『みんなの日本語初級I』を復習した。初級の初めの方は1日に4～5課扱った。学習が進むにつれて1日3～4課のペースになった。

3) 評価と課題

- ・ 出席状況・授業態度及び期末試験（個別の会話試験）より総合的に評価した。出席・授業態度とも良好であった。出席率はほぼ100%。
- ・ このクラス所属の学生は文法クラスでは2つのクラスに分けられている。一方のクラスの進度が他方よりやや遅れていることもあって、進度が遅い方のクラスに合わせた。しかしながら、予定どおり終えることができた。進度が遅い方のクラスの学生も学力が付いていたので、クラス運営上、特に支障はなかった。（山中和樹）

10. 日本事情2

本科目の受講者なし。

11. 日本の文化

本科目の受講者なし。

12. 応用日本語2

- ・ 受講者：1名（米国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント
日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

2) 方法

(1) 授業方法

導入として、新聞記事の黙読を行い、大意を把握させた。次に、教師が音読した。それから、学生に1文ずつ、順番に音読させた。その後、新しい文法事項や発音の問題点などを解説し、本文の内容質問等を行った。各回1つの記事を読み切り、次回にその内容に対する試験（記述試験）を実施した。

(2) 小テスト

各項目終了後、実施。全8回。

答案は実施の次週に採点返却し、模範解答を配布した。

(3) 中間テスト

実際に電話を使った応対試験を実施。

(4) 成績及び評価

期末試験(60%)、中間テスト(30%)、小テスト(10%)。

3) 評価と課題

- ・ 従来からの課題である、電話応対や名刺交換の現地練習もしたが、今回も人数が多かったの
で、一人あたりの練習時間をあまりとることができず、細かい指導ができなかった。使用する
記事を減らして、その分、実際の会話練習にあてることも検討しなければならない。
- ・ このクラスに参加した短プロからの学生は参加時期が遅れたためもあり、出席状況及び課題
提出状況があまりよくなかった。(山中和樹)

13. 多文化コミュニケーション2

本科目の受講者なし。

14. 多文化コミュニケーション3

本科目の受講者なし。

15. 伝統産業2

本科目の受講者なし。

② 2012年後期

《科目一覧》

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初級1	山中和樹、市村葉子 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	8
日本語初級2	今尾ゆき子、市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	5
日本語初中級	膽吹覚、村上洋子 市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	4
日本語中級(日本語B)	膽吹覚	プリント	1
日本語中級(日本語D)	山中和樹	プリント	1
日本語上級(日本語F)	今尾ゆき子		0
日本語上級(日本語H)	桑原陽子		0
日本事情1	今尾ゆき子		0
応用日本語1	山中和樹	プリント	1
多文化コミュニケーション1	山中和樹		0
伝統産業1	中島清	なし	18

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限	応用日本語 1			多文化コミュニケーション1	
2限	日本語初級 1	日本語初級 1	日本語初級 1	日本語初級 1	
	日本語初級 2	日本語初級 2	日本語初級 2	日本語初級 2	
		日本事情 1			
3限	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	伝統産業 1
		日本語中級(D)			
		日本語上級(H)			
4限		日本語中級(B)			
		日本語上級(F)			

《受講者数》

科目	国名	中	台	イン	ア	合
	国	国	湾	ド	メ	計
				ネ	リ <td></td>	
				シ	カ <td></td>	
				ア	合 <td></td>	
				衆 <td>衆 <td></td> </td>	衆 <td></td>	
				国	国 <td></td>	
日本語初級 1		6	1	0	1	8
日本語初級 2		3	1	1	0	5
日本語初中級		4	0	0	0	4
日本語中級(日本語B/日本語D)		0	0	0	1	1
日本語上級(日本語F/日本語H)		0	0	0	0	0
日本事情 1		0	0	0	0	0
応用日本語 1		0	0	0	1	1
多文化コミュニケーション 1		0	0	0	0	0
伝統産業 1		13	2	1	2	18
小計		26	4	2	5	37

《授業報告》

1. 日本語初級 1

- ・ 受講者：8名（漢字圏7名、中国6名、台湾1名、米国1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：56コマ
- ・ 担当教員：*山中和樹、村上洋子、市村葉子（*コーディネーター）

1) 教科書及び授業の目標

- ・ テキスト『みんなの日本語初級 I』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- ・ ひらがな・カタカナの導入と定着

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 1課を2コマで行った。
- ・ テキストの問題をほぼ毎回、宿題にして文法及び語彙の定着を図った。

(2) 復習テスト：3回実施（6～7課ごとに1回）

(3) ひらがな・カタカナの導入

- ・ ひらがなとカタカナはおおむね学習済みだったが、最初の7コマでそれぞれの清音・濁音・拗音・長音・促音・撥音、カタカナ特殊音の指導を行った。

(4) ディクテーション

- ・ 各課が終了した次の回で語彙テストおよびディクテーションを行った。

(5) 評価

- ・ 復習テスト3回(20%)＋期末テスト(80%)の結果をもとに総合的に判断した。

3) 評価と課題

(1) 文型・語彙導入

- ・ 今回は学生が総じて優秀で、理解力も応用力も十分あった。

(2) 文字習得

- ・ 8名全員が一応既習ではあった。授業開始前のひらがなテスト（清音43文字）では、悪くても33点（43点満点）は取れていた。一方、カタカナテスト（清音43文字）では、最低点は15点だった。しかしながら、文字学習が遅れていた学生でも、最終テストのときは、他の学生とほとんど差はなくなっていた。

(3) 学生の出席率と成績

- ・ 体調不良の場合を除き、全員、ほとんど毎回出席した。
- ・ 全員、授業態度もよく、積極的で、成績も優秀だった。

(4) アンケート調査

- ・ 8名中7名は授業には「非常に満足」で、1名は「少し満足」との回答だった。

(山中和樹)

2. 日本語初級2

- ・ 受講者：5名（漢字圏4名、非漢字圏1名、中国3、台湾1、インドネシア1）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：56コマ
- ・ 担当教員：*今尾ゆき子、市村葉子（*コーディネーター）

1) 教科書及び授業の目標

- ・ テキスト『みんなの日本語初級I』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- ・ ひらがな・カタカナの導入と定着

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 原則として2課を4コマで行った。1課を1コマで導入。3コマ目に2課分の談話練習と運用練習を行い、4コマ目に復習、復習テスト実施。
- ・ 「会話」：復習の時間に14回（1～25課）実施。ビデオを見た後クイズを実施。
- ・ 「聴解」：テキストの聴解問題（1～25課）および『聴解タスク25』（1～19課）
- ・ 「文字・表記」
 - ① 「ひらがな」6回、「カタカナ」5回導入（各コマ10分程度）。
 - ② 確認テスト；ひらがなテスト1（清音）、ひらがなテスト2（濁音・拗音・長音・撥音・促音）、カタカナテスト1（カタカナ→ひらがな）、カタカナテスト2（ひらがな→カタカナ）
 - ③ 「かな」導入後、談話練習と復習の時間に10分程度「語彙クイズとディクテーション」（5～25課）を21回実施。語彙クイズ6問、ディクテーション4問。

(2) 復習テスト

- ・ 6回実施。

(3) 成績および評価

- ・ 復習テスト6回(20%)と期末テスト(80%)の結果をもとに総合的に判断した。

3) 評価と課題

- ・ 開講前における「ひらがな」「カタカナ」の習得状況は5名全員ほぼ習得。2週間（6コマ）のかな文字導入期間で、特殊音もだいたい定着。句型導入に支障がなくなった。
- ・ 出席、授業態度、成績とも全員きわめて優良。
- ・ 5名のうち1名が非漢字圏の学生で、後半、授業についていくのが困難な様子だったが、持ち前の努力で乗り切った。漢字圏の学生の中で非漢字圏の学生が1名のみというクラスの運営においては、文法項目や文字・語彙の習得度の差異だけでなく、母語や文化の相違などにも配慮が必要である。難しい面もあるが、漢字圏だけのクラスよりも混在クラスのほうが学生、教師の双方にとって得るものは大きいと思われる。（今尾ゆき子）

3. 日本語中級

- ・ 受講者：4名（中国4名）

- ・ 授業時間：4コマ／週 総コマ数：56コマ
- ・ 担当教員：膽吹覚*、市村葉子、村上洋子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）
『みんなの日本語初級Ⅱ 文法解説』（同上）
- ・ 初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習する。
- ・ 日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

2) 方法

(1) 授業方法

第26課から第49課まで導入した。2コマで1課のペースで進めた。授業は文型の導入と定着を中心とした。具体的には語彙を導入した後で、練習A・B・Cを行った。理解の困難な文型については『書いて覚える文型練習帳』を用いて、その理解と定着を図った。会話はこのクラスではしなかったが、毎回1人ずつ1分間スピーチを担当させて、会話能力の向上を図った。宿題は教科書の課ごとに問題の部分を課した。また、7回に1回の割合で教科書を離れて、会話の授業を取り入れて、受講生の自発的な日本語会話能力の向上に努めた。

(2) 小テスト

第26～30課、第31～35課、第36～40課の計3回実施した。

(3) 成績および評価

期末試験(85%)、小テスト(15%)の配分で判断した。

3) 評価と課題

- ・ 期末試験の結果を見る限り、受講生全員が当初の授業目標を到達したといえるだろう。
- ・ 10月時点では4名の中の2名がやや日本語能力が低く、また1名が中級に近いレベルであった。そこで前者には授業以外での補習や再試験などを重ねることで、その学力向上を図り、後者の学生には全学向け日本語コースの日本語Ⅳを同時受講させることで、そのモチベーションを維持することを図った。初中級では、今後もこうした個別の対応が迫られるであろうが、今回のクラスをその試金石としたい。(膽吹覚)

4. 日本語中級1（日本語B）

- ・ 受講者：1名（米国1名）
- ・ 授業時間：1コマ／週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『朝日新聞』（朝刊・日曜版）「Be」掲載「ビトイーン」
- ・ 日本語中級レベルの留学生を対象として、日本語の読解力・表現力の向上を図る。

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 『朝日新聞』（朝刊・日曜版）「Be」掲載「ビトイーン」を教材として、読解とスピーチを行なった。

(2) 成績および評価

- ・ 期末試験（100%）

3) 評価と課題

- ・ 受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限り、当初の授業目標は達成できたと判断してよいであろう。
- ・ 受講生が6か国13名であったので、多様なスピーチが発表され、発表後の日本語によるQ&Aも積極的であった。
- ・ 今回も受講生の日本語能力の差、具体的には短期留学の中国人留学生（N1合格）と学部生（N2程度）との差が大きかった。中級クラスなのでN2程度の受講生に照準を合わせたクラスにしたが、N1レベルには不満が残る授業であったかもしれない。今後は、N1合格者が中級クラスを受講することを控えるよう指導することも必要かもしれない。（膽吹覚）

5. 日本語中級（日本語D）

- ・ 受講者1名（米国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：プリント（『日本語中級用 速読文化エピソード』より）
- ・ 速読により、内容把握ができるようにするとともに、文型・会話の練習を行い、コミュニケーション能力の向上を図る。

2) 方法

(1) 授業方法

1日に1～2課のペースで進化した。まず、黙読により内容把握をさせたあとで、音読により、学生の問題点（漢字の読み、発音等）をチェックした。その後、文法その他の重要項目の説明を行った後、練習問題や会話練習を行った。

(2) 評価方法

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提として、期末試験の成績、授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

この授業は共通教育の「日本語D」との共同授業である。中国人留学生の日本語読解能力が高く、短プロ生との日本語力が懸念されたが、特に問題はな方。

読解だけではなく、出身国の事情を紹介させるなど、対話も取り入れ、短プロ生が読解以外の能力を発揮できるように工夫した。

授業態度もまじめで積極的であった。（山中和樹）

6. 日本語上級（日本語F／日本語H）

本科目の受講者なし。

7. 日本事情 1

本科目の受講者なし。

8. 応用日本語 1

- ・ 受講生：1名（米国1名）
- ・ 授業時間：1コマ／週 総コマ数15コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教材及び授業の目標

- ・ 教材：テレビドラマDVD「僕の生きる道」全11話（各45分）
- ・ 最近の代表的なテレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

2) 授業方法

1コマで1話を学習する。まず、DVDを見て、ストーリーの概略を把握させる。次に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の感想及び自国との相違に関するレポートを提出させる。レポートは翌週、チェックした上で返却する。

全11話と特別編で12コマを使い、その他のコマをガイダンスや復習に当てた。

3) 評価と課題

- ・ この科目は共通教育科目「応用日本語Ⅱ」との合同授業である。正規の学部生、特別聴講生（交換留学生）も参加するので、日本語力の差が懸念されたが、レポート、授業態度を見る限りでは、差は見られなかった。
- ・ 授業態度、毎回のレポート、期末試験より総合的に評価した。
- ・ 本ドラマは高視聴率を記録した人気ドラマで、学生にも好評であった。 （山中和樹）

9. 多文化コミュニケーション 1

本科目の受講者なし。

10. 伝統産業 1

- ・ 受講生：18名（中国13、米国2、台湾2、インドネシア1）
- ・ 訪問見学回数：6回（1回の見学は授業3コマ相当）
- ・ 担当教員：中島清

1) 目標

伝統産業が地域や日本全体の産業技術の発展にどのように関わっているのか。家内工業から出発

した伝統産業がグローバル化にどう対処しているのか。伝統産業を守り、発展させながら、次世代に技術継承するためにどのような課題があるのか。和紙の里、漆器会館、陶芸村など、伝統産業の同業者組合と共同施設の役割はどのようなものなのか。そのような視点から、日本の現代産業の背景にある伝統産業を通して現代の日本社会の理解を深める。

2) 方法

福井の伝統工芸である、「越前焼」「越前和紙」「越前漆器」「越前打刃物」等の創作生産現場を6箇所訪問見学する。工房では伝統工芸の歴史、技術、研鑽、課題等について専門家(伝統工芸士)の話聞く。更に、研修施設での実習も行う。6回の訪問について毎回レポートを提出してもらい、理解の深まりを確認する。

3) 評価と課題

成績評価：見学訪問先ごとに提出される報告書に基づき評価する。

- ・ 生産現場を直接訪問し、伝統工芸士から話を聞くので、講義等では得がたい、深い理解と確かな知識が得られている。
- ・ 従来、バス片道1時間圏内だけでなく、若狭地方、加賀地方の伝統産業見学も行っていたが、2006年度より、見学先を福井市郊外に限定することになり、その結果、見学先数の確保が難しく、実質後期のみの開講となっている。(中島清)

《むすび》

2012年度は、前期に中国、インドネシア、アメリカの3カ国、後期に中国、台湾、インドネシア、アメリカの4カ国からの留学生が短期留学プログラムの日本語・日本事情科目及び伝統産業科目を受講した。

2012年前期開講科目は、「日本語中級」、「多文化コミュニケーション2」、「多文化コミュニケーション3」及び「伝統産業2」が受講者ゼロであった。

「日本語中級」の受講者がゼロであったのは、2011年度後期に「日本語初中級」が開講されなかった(その代わりに、「日本語初級3」が開講された)ことによるものである。

「伝統産業2」の受講者がゼロであった理由は次のとおり。

「伝統産業」については、「伝統産業1」(後期開講)か「伝統産業2」(前期開講)のどちらかを履修することになっているが、全員が「伝統産業1」を履修したため、「伝統産業2」の履修者がゼロになったことによる。

2012年度後期は、新規に受け入れた18名(初級:13名、初中級:4名、中級1名)が、それぞれの日本語力に応じて「日本語初級1」、「日本語初級2」、「日本語初中級」、「日本語中級」を受講した。中級レベルの学生が1名であったことから、「日本語上級(日本語F/H)」および日本事情科目(「日本事情1」「多文化コミュニケーション1」)の受講者がゼロになった。

(山中和樹)

3. 全学向け日本語コース

1. 概要

本コースは本学で学ぶすべての留学生及び外国人研究者を対象として開設された日本語の補講コースである。本年度は例年通り前後期ともに日本語Ⅰ～Ⅳの４クラスを開講した。

2. 開講科目と教科書

- ① 日本語Ⅰ（後期）……『みんなの日本語初級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）
- ② 日本語Ⅱ（前期後期共通）……『みんなの日本語初級Ⅱ』（同上）
- ③ 日本語Ⅲ（前期後期共通）……『みんなの日本語中級Ⅰ』（同上）
- ④ 日本語Ⅳ（前期）……『中級を学ぼう中級中期』（同上）
日本語Ⅳ（後期）……『日本語上級へのとびら』（くろしお出版）

3. プレースメント・テスト

前期：2012年4月20日（金） 受験者数10名

後期：2012年10月12日（金） 受験者数13名

4. 継続受講者数

		日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	登録可能数	1	19	3	11	34
	登録数	1	12	0	9	22
	登録率	100	63	0	81	65
後期	登録可能数	1	6	5	17	29
	登録数	1	1	5	13	20
	登録率	100	17	100	76	69

5. 受講登録者数

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	0	18	6	11	35
後期	11	2	6	17	36

6. 授業報告

《前期》

① 日本語ⅡA

- ・ 受講者：10名（中国6名、タイ、インドネシア、フランス、ラオス各1名）
- ・ 授業時間：5コマ/週 69コマ
- ・ 担当教員：高瀬公子、小野知恵美
- ・ コーディネーター：桑原陽子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級Ⅱ』『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説』（スリーエーネットワーク）
- ・ 初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 授業

カリキュラム作成に当たり、『みんなの日本語初級Ⅱ』の学習項目から、日常生活において他の既習表現で代用できるもの、受講生にとって必要性が低いものを除き、進度に余裕を持ち復習時間を十分設けられるようにした。

1課を2コマ、学習項目を減らした課によっては1課を1コマで終えるペースで授業を進め、2課終える毎に復習の時間を設けた。復習テストの前にその範囲の復習、50課終了後に総復習を行い、計18時間復習の時間を設けた。また、7月には1日2課分ずつ、26課からの新出動詞の復習も行った。

文型練習帳、会話ビデオなども活用し、表現の定着や会話力の向上に重点を置いた。

漢字については、基本的な漢字が読めるようにするため、『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字英語版』を用いて1日5、6字ずつ読みの練習をし、2ユニット毎に復習を行った。漢字圏の学生は、『みんなの日本語初級Ⅱ 漢字英語版』のユニットクイズ、『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字練習帳』を用いて、メインテキストの進度に合わせて、読みを中心とした練習を行った。

(2) 復習テスト・期末テスト

26～33課、34～41課、42～50課をひとまとめにして、復習テストを3回行い、テスト後に解答、解説し、習得が不十分と思われる箇所の指導を行った。期末テストの範囲は26～48課とした。復習テスト期末テスト時に、漢字の読み問題を10問出題した。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テスト各5%、期末テスト85%に換算して総合点で判断した。

3) 評価と課題

登録した10名のうち8名が継続して受講した。8名のうち3名は3分の2以上の出席を満たしていなかったが、最後まで受講し、各テストでは3人とも合格のレベルに達していた。出席を満たした5名のうち3名が合格し、成績は優だった。受講生は皆、真面目に学習に取り組んでおり、

新しい表現もよく理解し、熱心に練習していたが、一方で既習の表現や語彙が定着していないこともよく見られ、新たな学習項目を練習するためには、そこから復習する必要がある。そのようなクラスにおいて、受講生に合わせて学習項目を軽減し、復習時間を多く設けたことは継続受講につながったのではないかとと思われる。(小野智恵美)

② 日本語ⅡB

- ・ 受講者：8名（中国7名、ウガンダ1名）
- ・ 授業時間：5コマ/週 合計69コマ
- ・ 担当教員：敷田紀子、沢崎幸江、高瀬公子、齋藤ますみ
- ・ コーディネーター：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語Ⅱ』『みんなの日本語Ⅱ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
- ・ 初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 授業方法

学習範囲は『みんなの日本語Ⅱ』の26課から50課まで、1課を2回のペースで進めた。各課の導入項目を2回に分け、その日に導入した部分の練習を行なった。理解と定着の様子を見て、会話練習まで発展させた。副教材は主に文型練習帳を使い、視聴覚教材として会話ビデオや聴解タスクも使用した。会話ビデオに関しては課終了時にほぼ毎回視聴した。2～3課毎に復習の日を設け基本文型の定着を図った。また、26～33課、34～41課、42～50課をひとまとめとして復習テストを行い、前日はテスト範囲の復習に充てた。

(2) 漢字学習

漢字学習は漢字圏学習者と非漢字圏学習者でテキストを変えて複式で行った。漢字圏の学習者は『みんなの日本語初級Ⅱ漢字英語版』及び『みんなの日本語初級Ⅱ漢字練習帳』より抜粋して使用した。非漢字圏の学習者には『みんなの日本語初級Ⅰ漢字英語版』をもとに行い、途中ユニットクイズで復習した。両者とも漢字の読みを中心に学習した。復習テスト、期末試験には10点程度の漢字の読みを出題した。

(3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テスト85パーセント、復習テスト3回各5パーセントとして判定した。

3) 評価と課題

学生は全体的に発話力が高く、文法理解も良かった。皆積極的に発言し、授業は終始和やかな雰囲気であった。複式授業で行った漢字は、コース開講当初は漢字圏の学習者から漢字学習のレベルが低すぎるとの声が出たが、コース中盤からは未習の漢字語彙が増えたため、学生もレベルに納得したようだった。非漢字圏の学習者も漢字学習に熱心で、期末試験ではかなりの成果が出

た。今期のようなレベルの高いクラスの場合、限られた時間の中で基本的な会話練習に留まらず、いかに会話の運用力をつけるかが今後の課題であると思う。(齋藤ますみ)

③ 日本語Ⅲ

- ・ 受講者：6名（全員中国）
- ・ 授業時間：4コマ/週 合計56コマ
- ・ 担当教員：*敷田紀子（月）、齋藤ますみ（火）、村上洋子（水）、市村葉子（木）
- ・ コーディネーター：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書と教材：『みんなの日本語中級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）
- ・ 授業目標：日本語Ⅱ修了者を対象として、中級前期の4技能の運用力を高める。

2) 方法

(1) 授業方法

『みんなの日本語中級Ⅰ』の各課について、基本的に1日目文法、2日目文法と「話す聞く」、3日目「話す聞く」、4日目「読む書く」と「問題」というように4コマで進めた。4日目の内容の一部を3日目に繰り入れることも頻繁に行った。4課ごとに復習の時間1コマ、復習テストとフィードバックの時間1コマを設けた。漢字は各課の読解文の中から選んだ語彙10～30程度をリストアップし、学習中の課の4日間に読み方を2回以上繰り返し練習した。

(2) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テスト3回と期末テストの成績をもとにして判定した。

3) 評価と課題

登録した6名は全員まじめで理解力も高く優秀だった。授業中は活発に活動や練習に参加し学生同士の母語の使用などもなく、クラス運営も容易であった。ただ一つ残念なことに、専門の授業の関係で火曜日から木曜日までは必ず事前に申告した欠席者があり、全員揃うのは月曜日だけであった。受講生は背景が影響してか、読み書き文法の力のほうが、話す力を上回ると感じられた。今期のような優秀な学生の場合、授業内容の工夫次第で、話す力の一層の向上が期待できたかもしれない。期末試験は6名全員が受験し、いずれも70%以上の得点でこのレベルの求める実力がついていることがわかった。出席率も全員修了認定を満たした。学期中の3回の復習テストでも得点が60%を割るケースは一例もなかった。以上により全員修了要件を満たして合格とした。

(敷田紀子)

④ 日本語Ⅳ

- ・ 受講者：11名（中国11名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数55コマ
- ・ 担当教員：*澤崎幸江、市村葉子、村上洋子、酢谷尚子

- ・ コーディネーター：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書『中級を学ぼう中級中期』（スリーエーネットワーク）
- ・ 目標：中級中期に必要な「話す・聞く」「読む・書く」の4つの技能を等しく伸ばし、生き生きとしたコミュニケーション能力を養成すること。

2) 方法

(1) 授業

4日に1課のペースで進めた。1日目にキーワードと文法（前半）、2日目に文法（後半）と本文の言葉、3日目に本文の内容と聴解、4日目に作文、プラスアルファおよび関連読み物を学習した。

(2) 活動

今期中12回活動を行ったが、新聞記事の読解や映画鑑賞のほか、『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』（アルク）を抜粋して使用し、マンガを楽しく読みながら、語彙や文型のほか、日本特有の文化や季節感についても紹介した。

(3) 成績評価

センター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

クラスは、日本語Ⅲのクラスに合格したばかりの学生から、日本語能力試験1級に合格している学生まで、レベルの差が大きかったが、分からないところはお互いに教えあうなど、協力してよい雰囲気での授業が進んだ。大学院生がほとんどで、研究などで多忙のため、週4コマのクラスすべてに出席できる学生は1名だけだったが、それでも週2、3回は出席するなど、意欲的に学習に取り組んでいる学生が多かった。期末試験は5名が受験し、全員が合格したが、そのうち4名は優で合格するというよい結果であった。残念だったのは、学生全員が中国人であったため、文化の違いなどについて話し合う機会を設けても、日本と中国の文化についての話で終わってしまったことである。多国籍な学生構成であればもっと活発に意見交換ができたのではないかと思う。

(澤崎幸江)

《後期》

① 日本語 I

- ・ 受講者：8名（中国4名、フランス1名、モンゴル1名、マレーシア1名、アメリカ1名）
- ・ 授業時間：5コマ/週 67コマ
- ・ 担当教員：桑原陽子（コーディネーター）、澤崎幸江、敷田紀子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書『みんなの日本語初級 I』『みんなの日本語初級 I 文法解説書』
- ・ 日本語で簡単な口頭でのコミュニケーションができるようになる。

- ・ 日本語のひらがな・カタカナの読み書きができるようになる。

2) 方法

(1) 授業方法

1 課をおよそ2日で終えるペースで学習した。副教材として、適宜聴解や文型練習プリント類を使用した。

(2) 復習クイズ

学生の習得状況を確認するため、3回の復習クイズを実施した。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習クイズ15%と期末試験85%として評価した。

3) 評価と課題

出席者の学習態度は良好であった。来期の課題は、教科書の進捗については大きな変更は必要ないが、Can-do statement の観点からシラバスを検討しなおし、学習目標を明確にすることと、非漢字系学習者のための漢字導入である。(桑原陽子)

② 日本語Ⅱ

- ・ 受講者：4名（フランス、ミャンマー、ルーマニア、ラオス各1名）
- ・ 授業時間：5コマ/週 66コマ
- ・ 担当教員：高瀬公子、小野知恵美
- ・ コーディネーター：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級Ⅱ』『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説』（スリーエーネットワーク）
- ・ 初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 授業

1 課を2コマで終えるペースで進め、3課終える毎に復習の時間を設けた。復習テストの前にその範囲の復習、50課終了後に総復習を行い、計13時間復習の時間を設けた。また、26課からの新出動詞を、1月に1日2課分ずつ絵カードを利用して復習した。メインテキストの他に『文型練習帳』、会話ビデオなども活用し、また聞きとりの練習として各課の「問題」の2を行い、表現の定着や会話力の向上を図った。漢字については、基本的な漢字が読めるようになることを目的とし、『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字英語版』を用いて1日5、6字ずつ読みを中心とした練習をした。2ユニット毎にテキストの「ユニットクイズ」を利用して復習を行った。

(2) 復習テスト・期末テスト

26～33課、34～41課、42～50課をひとまとめにして、復習テストを3回を行い、テスト後に解答、解説し、習得が不十分と思われる箇所の指導を行った。期末テストの範囲は26～48課とし

た。復習テスト・期末テスト時に、漢字の読み問題を10問出題した。試験の配点には含まず、100点+10点という形にした。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テスト各5%、期末テスト85%に換算して総合点で判断した。

3) 評価と課題

受講生4名のうち、出席率を満たし、期末試験を受けたのは3名で、優2名、可1名だった。受講生は皆真面目に出席し学習に取り組んでおり、少人数ながら、多国籍で話題も豊富であり、活気があるクラスだった。また、積極的に質問したり、授業外でも日本語で交流したり、上達しようという熱心さも感じられた。漢字の学習についても意欲的で、読みだけでなく自主的に書く練習もし、プリントなどでは積極的に漢字を使用していた。今回は、全員が非漢字圏の学生で、また最後まで受講した学生は皆、毎日が出席可能だったこともあり、順調に授業を進めることができた。
(小野知恵美)

③ 日本語Ⅲ

- ・ 受講者：5名（中国4名、ウガンダ1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 合計54コマ
- ・ 担当教員：市村葉子、高瀬公子、*齋藤ますみ、
- ・ コーディネーター：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語 中級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）
『みんなの日本語 中級Ⅰ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
- ・ 中級前期レベル者を対象にし、初級から中級への橋渡しに必要な「話す・聞く」「読む・書く」の総合的な言語能力を培う。

2) 方法

(1) 授業

1課を3コマのペースで授業を進めた。会話、読解それぞれの練習の前に、各々で取り上げられている文法を先に学習してから、各練習に入った。読解の後にはできる限りその内容に関連したテーマで話したり書いたりした。復習として2課毎に計6回、教科書の問題（聴解を含む）を行った。他に3回の「活動」の時間を設けたがこれはほぼ復習の時間に充てた。

(2) 漢字学習

漢字については各課の読解から語彙を選んでシートを作成し、漢字の読み方を書く練習を繰り返し行った。

(3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、3回の復習テストを各5%、期末テストを85%で換算し総合得点で判定した。

3) 評価と課題

コースの中盤から二人の学生が専門の授業で多忙になり、授業に来なくなったが、最後まで来た三人の学生は、真面目に取り組み、和やかな雰囲気の中で授業が進められた。又、今期は非漢字圏学習者の負担を軽減するための、漢字学習の複式授業をやめ、漢字圏学習者と同一のシートを使用し、漢字の授業を行なった。非漢字圏学習者の期末試験の漢字は高得点であった。コースの中盤以降、漢字圏、非漢字圏学習者の習得に大きな差が出来、クラス運営にかなり工夫が必要だった。特に文法や読解の時間は複式での授業が不可欠となり、漢字語彙に長けている中国の学習者と非漢字圏の学習者との合同クラスの難しさを痛感した。(齋藤ますみ)

④ 日本語Ⅳ

- ・ 受講者：15名（中国15名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：54コマ
- ・ 担当教員：齋藤ますみ、高瀬公子、村上洋子*
- ・ コーディネーター：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『日本語上級へのとびら』（くろしお出版）
- ・ 中上級の文法の定着と語彙力、読解力を養うことで、さらなる日本語能力のレベルアップを目指す。

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ メインテキストには「日本語上級へのとびら」を用いた。1課を3.5コマで終えるペースで進めた。読み物、会話文を中心に進め、テキストの「言語ノート」や、「文化ノート」の項目も取り入れた。

(2) 成績および評価

期末テストの結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。

3) 評価と課題

受講者15名でスタートした。授業やゼミの関係で、週4回出席できる学生は少なかった。開講時は人数が多かったが、実験や就職活動などが忙しくなり、次第に学生の数は減少した。12月にN-1を受験する学生も数名いて、その授業を優先し、(N-1の授業が3限目、日本語Ⅳが4限目と続いた事も関係あるかもしれない) 来なくなった学生もいた。今回のメインテキスト「日本語上級へのとびら」は、中級の文法だけでなく、日本の文化や歴史、日本事情を学ぶことができ、学生たちの満足度は高かったように思われる。期末テストの受験者は4名で、全員合格した。受験できる規定の出席日数に達している学生は6名いたが、そのうち2名は1月になってから、卒業発表が忙しく、授業にこなくなっていた。(村上洋子)

7. むすび

今年度は本コース受講者が30人台に減少したことが最も危惧される。本コースの主たる受講生は工学研究科の大学院生である。彼らの多くは英語で学位論文を書く。また、日常生活でもほとんど日本語を必要としない。こうした現状を踏まえて、補習としての本コースを再考しなければならないだろう。

4. 日本語能力試験対策講座

《前期》

① 日本語能力試験対策講座N-1クラス

- ・ 受講者：15名（中国13、メキシコ1、ベトナム1）
- ・ 授業時間：2コマ/週 総コマ数：30コマ
- ・ 担当教員：小野 知恵美
- ・ コーディネーター：山中和樹

1) 教材

- ・ 『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN1文法』（アスク出版）
（以下抜粋して使用）
- ・ 『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN1語彙』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験N1・N2試験に出る読解』（桐原書店）
- ・ 『新完全マスター聴解 日本語能力試験N1』（スリーエーネットワーク）
- ・ 『日本語能力試験 スーパー模試N1』（アルク）
- ・ 『日本語能力試験 模試と対策 Vol.2』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 JLPT 公式問題集N1』（凡人社）
- ・ 日本語能力試験N1の合格を目指し、そのための語彙力、文法力、読解力、聴解力を養う。

2) 授業方法

4月の初めから週2コマの授業を行い、6月後半の土曜日に2回、模擬試験と解説を行った。授業の進め方は、語彙、文法はそれぞれ「日本語総まとめ」の6日分を毎週の宿題とし、授業で宿題の範囲のチェック問題（7日目）を行い、解説をした。テキスト終了後は、試験と同じ形式の問題を解き、解説をした。読解、聴解は、試験の問題形式（大問1問）ごとに1回ずつ練習問題を行い、その中から全体に正解しにくい形式の問題を繰り返し取り上げて練習し、苦手分野の克服を目指した。

3) 評価と課題

15名の学生が登録したが、そのうち3名は旧1級合格者などN1レベルに達しており、授業は受講せず、模擬試験、解説のみを受けた。残り12名のうち、9名が継続して受講した。能力試験を受験したのは14名で、11名が合格した。

受講生は真面目に学習に取り組み、クラスの雰囲気もよく、前半は取り組みに差が見られたものの後半になると皆熱心に学習を進めるようになった。また、他の科目に比べ読解は最初からよくできている学生が多く、授業では読解に多くの時間を割かず、N2後新たに覚える項目が多い語彙や文法に集中できた。

今回、PTの点数にかかわらず全員の受講を認めたが、確かにN1合格に向けては短時間で達成するには難しい学生もおり、PTの結果からそのことが表われていると感じるが、二期かけて準備する学生もいることも考慮に入れ、N2（2級）に合格しているという条件を加え、受講を認

めればよいのではないかと思う。また模擬試験について、試験日間近に続けて行うよりも、1回目を早めに実施したほうが、受講生自身にとってもより効果的に対策が考えられ、やる気にもつながるのではないかと感じた。(小野知恵美)

② 日本語能力試験講座N-2クラス

- ・受講者：9名(中国9名)うち10月からの参加3名(短期プログラム留学生)
- ・授業時間：2コマ/週 合計30コマ(9月～11月 1回4コマの模擬試験2回を含む)
- ・担当教員：星摩美

1) 教材

- ・『日本語総まとめ N2 語彙編』(アスク出版) 主教材として受講生各自購入
- ・『日本語総まとめ N2 文法編』(アスク出版) 抜粋して使用
- ・『完全マスター 読解 日本語能力試験N2』(スリーエーネットワーク)
- ・『完全マスター 聴解 日本語能力試験N2』(スリーエーネットワーク)
- ・『パターン別 日本語能力試験2級徹底ドリル』(アルク)
- ・『日本語総まとめ N2 文字編』(アスク出版)

模擬試験、練習用として使用

- ・『日本語能力試験 N2 模試と対策 vol.1』(アスク出版)
- ・『日本語能力試験 N2 模試と対策 vol.2』(アスク出版)
- ・『日本語能力試験 公式問題集N2』(凡人社)

2) 授業方法

講座開始時、受講生は『みんなの日本語II』を終えたばかりの者が多く、縮約形などの会話独特の表現や、読解に慣れていなかったため、最初の4回で聴解と読解の基本的な練習を行った。その後、第1回模擬試験までの12回は、毎回、語彙と文法で約1時間、聴解・読解で約30分の時間配分で、語彙表現を身につけることを中心に授業を行った。11月3日の模擬試験から本試験までの6回は、試験結果を参考に弱かった問題形式に焦点を当てて練習を行った。

各科目の進め方としては、語彙と文法は主教材を宿題として課し、授業ではチェックテストを行い、解説した。聴解は課題解決などの比較的答えを引き出しやすいものと即時応答の会話独特の表現を中心に授業を進めた。読解は今回受講生が全員中国籍で漢字が理解できたため、スキミングの問題から練習し、短文読解を中心に扱った。漢字については全員が中国籍のため、読み方について最初の5回10分ほどずつ扱ったが、後はすべて宿題として課した。

3) 評価と課題

初級終了直後の受講生が多かったため、開講直後は語彙表現もまだ不足しており、聴解、読解にも慣れていなかった。しかし、熱心な受講生が多く、課題をきちんとこなし出席し、着実に力をつけていった。今回は全員が中国籍で、漢字が理解できたため、授業の方法もそれに合わせて組むことができた。しかし、非漢字圏の受講生がいる場合は違った授業の進め方を考える必要があるだろう。

実際に能力試験を受けたのは6名(1名は短期プログラム生)で、全員が合格できた。(星摩美)

《後期》

① 日本語能力試験対策講座N-1クラス

- ・ 受講者：15名(中国13、韓国1、ドイツ1)
- ・ 授業時間：2コマ/週 総コマ数：30コマ
- ・ 担当教員：小野知恵美
- ・ コーディネーター：山中和樹

1) 教材

- ・ 『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN1文法』(アスク出版)
- ・ 『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN1語彙』(アスク出版)
- ・ 『日本語能力試験N1・N2試験に出る読解』(桐原書店)
- ・ 『新完全マスター聴解 日本語能力試験N1』(スリーエーネットワーク)
- ・ 『日本語能力試験 スーパー模試N1』(アルク)
- ・ 『日本語能力試験 模試と対策 Vol. 2』(アスク出版)
- ・ 『日本語能力試験 JLPT 公式問題集N1』(凡人社)

2) 授業方法

9月の中旬から週2コマの授業を行い、11月の土曜日に2回、模擬試験と解説を行った。授業の進め方は、語彙、文法はそれぞれ『日本語総まとめ』の6日分を毎週の宿題とし、授業で宿題の範囲のチェック問題(教科書の「7日目」)を行い、解説をした。読解、聴解は、試験の問題形式(大問1問)ごとに練習問題を行い、その中から全体に正解しにくい形式の問題を繰り返し練習し、苦手分野の克服を目指した。1コマの授業で、語彙と読解、文法と聴解というように2科目ずつ進めた。

3) 評価と課題

15名の学生が登録し、受講していたのは8、9名だったが、模擬試験の頃から出席学生が減っていった。能力試験を受験したのは13名で、6名が合格した。

受講生の中にはN1の勉強を始めたばかりの学生も多く、特に語彙や文法は解くのにも解説にも時間がかかり、読解、聴解に比べ多くの時間を使うことになり、予定通りに進めることができなかった。しかし、試験の配点やこれまでの出題の難易度、結果から見て、やはり読解、聴解も多くの問題を解いて準備をしておくべきだと思われる。

模擬試験について、前回は試験日間近に2週続けて行ったが、今回は試験結果から苦手分野や学習不足の点に気づき、合格に向けてより効果的に学習できるように、1回目を早め能力試験1ヵ月前に実施した。しかし、受講生によっては、まだ合格レベルに達していないと受けたがらなかったり、どちらか1回で最後のほうが良いと考えたりするようであった。実施時期、方法、受講生への伝え方などをよく考え、模擬試験をより効果的に活用していきたいと考える。

(小野知恵美)

② 日本語能力試験対策講座N－2クラス

- ・ 受講者：9名（中国9名）うち10月からの参加3名（短期プログラム留学生）
- ・ 授業時間：2コマ／週 合計30コマ（9月～11月 1回4コマの模擬試験2回を含む）
- ・ 担当教員：星摩美

4) 教材

- ・ 『日本語総まとめ N2 語彙編』（アスク出版）主教材として受講生各自購入
- ・ 『日本語総まとめ N2 文法編』（アスク出版）抜粋して使用
- ・ 『完全マスター 読解 日本語能力試験N2』（スリーエーネットワーク）
- ・ 『完全マスター 聴解 日本語能力試験N2』（スリーエーネットワーク）
- ・ 『パターン別 日本語能力試験2級徹底ドリル』（アルク）
- ・ 『日本語総まとめ N2 文字編』（アスク出版）模擬試験、練習用として使用
- ・ 『日本語能力試験 N2 模試と対策 vol.1』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 N2 模試と対策 vol.2』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 公式問題集N2』（凡人社）

5) 授業方法

講座開始時、受講生は『みんなの日本語Ⅱ』を終えたばかりの者が多く、縮約形などの会話独特の表現や、読解に慣れていなかったため、最初の4回で聴解と読解の基本的な練習を行った。その後、第1回模擬試験までの12回は、毎回、語彙と文法で約1時間、聴解・読解で約30分の時間配分で、語彙表現を身につけることを中心に授業を行った。11月3日の模擬試験から本試験までの6回は、試験結果を参考に弱かった問題形式に焦点を当てて練習を行った。

各科目の進め方としては、語彙と文法は主教材を宿題として課し、授業ではチェックテストを行い、解説した。聴解は課題解決などの比較的答えを引き出しやすいものと即時応答の会話独特の表現を中心に授業を進めた。読解は今回受講生が全員中国籍で漢字が理解できたため、スキミングの問題から練習し、短文読解を中心に扱った。漢字については全員が中国籍のため、読み方について最初の5回10分ほどずつ扱ったが、後はすべて宿題として課した。

6) 評価と課題

初級終了直後の受講生が多かったため、開講直後は語彙表現もまだ不足しており、聴解、読解にも慣れていなかった。しかし、熱心な受講生が多く、課題をきちんとこなし出席し、着実に力をつけていった。今回は全員が中国籍で、漢字が理解できたため、授業の方法もそれに合わせて組むことができた。しかし、非漢字圏の受講生がいる場合は違った授業の進め方を考える必要があるだろう。

実際に能力試験を受けたのは6名（1名は短期プログラム生）で、全員が合格できた。

（星摩美）

《まとめ》

日本語能力試験対策講座は単位認定されておらず、同一時間帯に単位認定される講義が入って

いれば、受講生は当然そちらを優先させなければならない。毎年、このような事情があるので、週に1回しか受講できない学生もいる。

2012年度の日本語能力試験の受験結果は次のとおり。

前年度と比べると、合格率が上昇しているようである。

		対策講座受講者数	日能試受験者数	合格	不合格
前期	N-1	16	14	11	3
	N-2	12	11	7	4
後期	N-1	14	13	6	7
	N-2	6	5	5	0

(山中和樹)

5. 共通教育科目・日本語日本事情科目

《概要》

2012年度、センター教員は、センター開講科目以外に、共通教育センターが開講する基礎教育科目・外国語科目としての日本語科目と、教養教育副専攻科目の日・中言語文化系及び日本語・日本文化系科目を担当した。2012年度の開講科目は以下の通りである。

《2012年度 開講科目一覧》

科目	開講時間	単位	担当教員
日本語科目			
日本語A	前期火 4	2	山中和樹
日本語B	後期火 4	2	膽吹覚
日本語C	前期火 3	2	桑原陽子
日本語D	後期火 3	2	山中和樹
日本語E	前期火 4	2	今尾ゆき子
日本語F	後期火 4	2	今尾ゆき子
日本語G	前期火 3	2	膽吹覚
日本語H	後期火 3	2	桑原陽子
日・中言語文化系 日本語・日本文化系科目			
応用日本語Ⅰ	前期月 2	2	山中和樹
応用日本語Ⅱ	後期月 1	2	山中和樹
日本の文化	前期木 1	2	膽吹覚
日本事情A	前期火 1	2	膽吹覚
日本事情B	後期火 2	2	今尾ゆき子
多文化コミュニケーションA	後期木 1	2	山中和樹
多文化コミュニケーションB	前期木 1	2	山中和樹
多文化コミュニケーションC	前期火 1	2	桑原陽子

<日本語A>

【受講生】7名（正規生3名、交換留学生4名）

【目標】

- ・ 「テ形」と連用中止の使い分け、「は」と「が」の使い分け、「のである」文の用法や文の接続などを学習し、それらを実際の作文で使用できるようにする。

【教材】プリント教材

【方法】

- ・ 平均すると、大体2～3コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。
- ・ 成績評価：中間試験(15%)、期末試験(80%)、課題(5%)

【評価と課題】

- ・ 正規生の内訳は中国1名、マレーシア2名であったが、中国人以外の学生も読解には特に問題はなかった。交換留学生の4名のうち、中国出身は3名、ドイツ1名。
- ・ ルビなしの本文の理解に困らないように、主に非漢字圏の学生のために、漢字の読みのプリントを全員に配布した。各課の初めに漢字の読みのプリントを配布し、漢字の読み及び意味について確認した。試験問題も漢字が負担にならないように配慮した。
- ・ 今期は、新たに「テ形」と発見や条件の「と」の使い分けなどに関する練習問題のプリント教材を作成し、期末試験にも出題したが、予想以上に理解が進んでいることが分かった。

(山中和樹)

<日本語B>

【受講生】12名（学部生名3、科目等履修生8名、日研生1）

【目標】

- ・ さまざまなテーマの文章（グラフを含む）を読んでスピーチをすることによって読解力・プレゼンテーション能力の向上をはかる。

【教材】朝日新聞（日曜版）「Be トゥウィーン」

【方法】

- ・ 『朝日新聞』（朝刊・日曜版）「Be」掲載「ビトウィーン」を教材として、読解とスピーチを行った。
- ・ 成績および評価 期末試験(100%)

【評価と課題】

- ・ 受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限り、当初の授業目標は達成できたと判断してよいであろう。
- ・ 受講生が6か国13名であったので、多様なスピーチが発表され、発表後の日本語によるQ&Aも積極的であった。
- ・ 今回も受講生の日本語能力の差、具体的には短期留学の中国人留学生（N1合格）と学部生

(N2程度)との差が大きかった。中級クラスなのでN2程度の受講生に照準を合わせたクラスにしたが、N1レベルには不満が残る授業であったかもしれない。今後は、N1合格者が中級クラスを受講することを控えるよう指導することも必要かもしれない。(膽吹覚)

<日本語C>

【受講生】11名(正規生7、非正規生4名)

【目標】

- ・ 文型、語彙を拡充し、適切な表現・語彙を使って与えられた映像について、より詳しい説明・描写ができるようになることを目指す。さらに学生生活上必要なメールの基本的な書き方を学ぶ。

【教材】教科書 教科書は指定しない。授業中にハンドアウト等を配布する。

【方法】

- ・ 教師が用意した15回分のVTR(1回数分)について、詳しく適切に描写する練習を行う。口頭での説明練習後、筆記による語彙・文法の確認を行う。主としてペアワークによる活動を行う。
- ・ 授業5回ごとに口頭表現のテストを行い(計3回 配点は各30点)、それに平常点(10点満点)を加算する。

【評価と課題】

- ・ 授業態度は非常に良好であった。
- ・ 比較的上手にも書いても、テストではうまく話せない学習者を授業中にどう指導するかが課題である。(桑原陽子)

<日本語D>

【受講生】8名(正規生4名、非正規生4名)

【目標】速読により、内容把握ができるようにするとともに、文型・会話の練習を行い、コミュニケーション能力の向上を図る。

【教材】プリント(『日本語中級用 速読文化エピソード』より)

【方法】

1日に1~2課のペースで進行した。まず、黙読により内容把握をさせたあとで、教師が音読する。その後で、一文ずつ、交代で学生に音読させ、学生の問題点(漢字の読み、発音等)をチェックした。その後、文法その他の重要項目の説明を行った後、練習問題や会話練習を行った。

【評価と課題】

- ・ この授業は短期プログラムの「日本語中級」との共同授業である。非漢字圏の学生が4名いたが、うち3名は中国人学生ほどではないが、読む速度も速く、読解力に遜色はなかった。残る1名は読解にやや時間がかかったものの、内容は把握できていた。読解だけではなく、出身国の事情を紹介させるなど、対話も取り入れ、他の学生が読解以外の能力を発揮できるように工夫した。
- ・ おおむね出席状況もよく、授業態度もまじめであった。(山中和樹)

<日本語E>

【受講生】18名（学部生3名、交換留学生14名、日研生1名）

【目標】

- ・ さまざまなテーマの文章を読んで要約することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

【教材】柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）、プリント

【方法】

- ・ 1課につき1コマのペースで課題文を読み、語句の意味や指示語の指示内容を確認し、文章構成と内容の把握を行った。2コマ目に「内容の問題」「言葉の問題」を解くことにより文章を理解できたかどうか確認した。
- ・ 課毎にテキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成のクイズ（5問）を10回実施。また、当該テーマの感想・経験等の文章作成（160字）を宿題として10回課し、添削後返却した。
- ・ 成績評価：宿題提出（50%）、期末試験（50%）

【評価と課題】

- ・ 受講者は学部生3名（3年生、2年生、1年生各1名）、交換留学生14名、日本語日本文化研修生1名（中国14名、台湾、マレーシア、インドネシア、メキシコ各1名）という構成であった。さらに本科目は短期プログラム科目の「日本語上級」と合同授業で、今回は短期プログラム生1名が受講していた。
- ・ 出席・授業態度は良好で、宿題にもまじめに取り組んだ。その結果、短文作成、文章作成力が大幅に向上した。（今尾ゆき子）

<日本語F>

【受講生】10名（学部生1、交換留学生9、中国8、韓国1、ドイツ1）

【目標】

- ・ さまざまなテーマの文章を読んで要約して感想文を作成することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

【教材】柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）、読解プリント

【方法】

- ・ 2課を3コマのペースで課題文を読み、語句の意味の確認、文章構成・内容の把握を行った。
- ・ 課毎に、テキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成5題のクイズを授業で実施した。また、課題に関して感想や経験等の文章作成（160字）を宿題とし、添削後返却した。
- ・ 成績評価：クイズ・宿題提出（50%）、期末試験（50%）

【評価と課題】

- ・ 出席・授業態度は良好。
- ・ 漢字圏の学生8名と非漢字圏の学生2名の構成である。読解のテキストは非漢字圏の学生に

とってかなり困難であった。しかし、感想文の作成と添削により受講生の文章表現力はかなり向上した。
(今尾ゆき子)

<日本語G>

【受講生】21名（学部生名5、科目等履修生名15、日研生1）

【目標】

- ・ さまざまなテーマの文章（グラフを含む）を読んでスピーチをし、意見文を書くことによって読解力・プレゼンテーション能力・作文能力の向上をはかる。

【教材】朝日新聞（日曜版）「Be トゥウィーン」

【方法】

- ・ 新聞から4つの記事を選択し、それぞれ読解1コマ、スピーチ2コマ、作文1コマの割合で授業を進めた。作文はすべて添削指導した。
- ・ 成績評価：期末試験(100%)

【評価と課題】

- ・ 受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限り、当初の授業目標は達成できたと判断してよいであろう。秋入学やSNSなど受講生の興味をひく教材が功を奏したのかもしれない。
- ・ 受講生の日本語能力の差、具体的には短期留学の中国人留学生（N1合格）と学部生（N2程度）との差が大きく、前者がクラスの80%を占める現状では、どうしても前者に合わせた授業にならざるをえない。後者への配慮・指導は留意した積りであるが、今後とも更なる支援を考える必要があるだろう。
(膽吹覚)

<日本語H>

【受講生】12名（正規生1）

【目標】インターネットサイトのニュース記事・新書から時事問題を取り上げ、関連語彙・表現を学び効率よく読む技術を身につける。特に、予測して読む力をつけることを重視する。また、授業中に読んだ素材を要約する、複数記事の相違点を比較する、意見を述べる等、レポートとしてふさわしい文章を作成する。

【教材】ニュース記事等の生教材

【方法】

- ・ インターネットサイトの記事を素材として使用し、具体的な読みの技術を提示して読む練習を行った。必要に応じてピアリーディングを行い、回答の是非についてはクラス内で議論を行った。読解記事の要約、書き換え等の課題を課し、書く訓練を行った。大学生活に必要なメールの書き方も学習した。
- ・ レポート課題（各10点 自由提出・最大14回）のうち得点の高い10回分を評価対象とした。

【評価と課題】

- ・ 受講生のほとんどが中国人であるため、ピアリーディングをうまく機能させるのに工夫が必要である。(桑原陽子)

<日本事情A>

【受講生】12名(学部生2名、科目等履修生10名)

【目標】

- ・ 福井県の地理・交通・住宅事情・教育事情・観光・ライフスタイルなどについて学ぶことで、福井県に関する知識を醸成し、理解を深める。

【教材】『いいとこ福井』(福井県国際交流会館)

【方法】

- ・ 教材の掲載順に従って講義形式で進めた。必要に応じて県作成の統計データを使用した。
- ・ 福井県立歴史博物館での見学実習を1コマ分取り入れた。
- ・ 最終日に受講生によるプレゼンテーションを行った。
- ・ 成績評価：レポート(100%)

【評価と課題】

- ・ 留学生対象の「福井学」の構築を目指しているが、机上の論理に終始することが懸念された。そこで、今期初めて実施した博物館での見学は大きな可能性を提示してくれた。館の学芸員との懇談を経て、次年度は授業の進度に応じて4回の見学を行ない、留学生の理解を深められればよいと考えている。博物館を巻き込んだかたちでの新たな「福井学」の構築を図りたい。

(膽吹覚)

<日本事情B>

【受講生】26名(学部生10名、交換留学生15名、日研生1名)

【目標】日本の社会構造や文化、日本人の考え方・価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。

【教材】ハンドアウト(『日本を知る—その暮らし365日—』から抜粋)、プリント、DVD：「年中行事としきたり」「越前・若狭いろはかるた」など

【方法】

- ・ ハンドアウト、DVD等で年中行事やしきたりについて学び、日本人の考え方を知る。
- ・ 見学授業(福井市立郷土歴史博物館、養浩館、福井県立歴史博物館)を行い福井の歴史、風土、産業について学んだ。
- ・ 俳句の成り立ちと形式を学んで各自6句の投句を課し、句会形式で合同評価した。
- ・ かるた大会(「越前・若狭いろはかるた」使用)を牧島荘にて実施。読み札の内容(福井の名所・名産等)を事前学習の後、畳の上で日本の伝統的な遊びを体験。
- ・ 成績及び評価
レポート(国民の休日・博物館見学・句作・かるた大会)：50%、期末試験：50%、

【評価と課題】

- ・ 学生の授業態度、出席率ともに良好。特に見学授業や俳句大会・かるた大会など参加型の授業を楽しみ、レポート作成も真面目に取り組んだ。
- ・ 今期は5カ国（中国、マレーシア、ドイツ、インドネシア、ラトビア）の学生が受講した。
- ・ 博物館の見学では、後日、友人や両親を案内するというリピーターが出たり、牧島荘でのカルタゲームは畳の上で行ったことが新鮮だったという感想など、体験型授業は一定の成果が得られた。また、「越前・若狭いろはかるた」の暗記などを通じて福井の自然、歴史、文化に興味を持ち、彼我の違いから自国の文化や価値観を再認識するようになったことを評価したい。

（今尾ゆき子）

<日本の文化>

【受講生】19名（学部生8名、科目等履修生11名）

【目標】

- ・ マンガを楽しみながら日本人の考え方や季節感、現代日本の家族について学ぶ。

【教材】『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』（アルク）

【方法】

- ・ 教科書にそって講義形式で進めた。確認問題と応用問題は授業に行った。
- ・ 成績評価：期末試験(100%)

【評価と課題】

- ・ マンガを教材とすることで受講生の興味関心をひくことができた。
- ・ 受講生からの質問も活発で、積極的な授業参加が行われた。
- ・ 受講生数に比して教室が広すぎたので、来期は適当な教室に変更したい。（膽吹覚）

<多文化コミュニケーションA（異文化コミュニケーションA）>

【受講生】39名（日本20名、中国11名、ベトナム3名、マレーシア2名、インドネシア1名、韓国1名、ラトビア1名）

【目標】

日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

【教材】プリント

【方法】

(1) 授業はプリントやCDを利用した講義、及び学生の発表とから成る。学習内容は①文化と文明について、世界の文明圏の紹介、②自己紹介、名前のつけかた、③学生の出身国の国歌の紹介、④学生の出身国の祝祭日及び年中行事、⑤伝統的な遊び、⑥死後の世界であった。

(2) 復習クイズ

復習クイズは実施していないが、「自己紹介、名前のつけかた」及び「国旗、国歌」について

の中間レポートを課した。

(3) 成績及び評価

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提とした。その上で、中間レポート2種、期末レポート（1. 祝祭日及び年中行事、2. 伝統的な遊び、3. 死後の世界についての比較。この3つのうちの1つを選択）、授業態度等を考慮して、総合的に判断した。

【評価と課題】

今回は、留学生の出身国も多岐にわたり、話題がバラエティーに富んだことがよかった。一方、死後の世界が駆け足になったことや、「縁起のいい数、悪い数」や各国の簡単なあいさつに割く時間が取れなかったのが反省材料である。 (山中和樹)

<多文化コミュニケーションB（異文化コミュニケーションB）>

【受講生】40名（日本24名、中国10名、マレーシア4名、インドネシア1名、韓国1名）

【目 標】

日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

【教 材】プリント

【方 法】

(1) 授業はプリントやCDを利用した講義、及び学生の発表とから成る。学習内容は①文化と文明について、世界の文明圏の紹介、②自己紹介、名前のつけかた、③学生の出身国の国歌の紹介、④学生の出身国の祝祭日及び年中行事、⑤伝統的な遊び、⑥死後の世界であった。

(2) 復習クイズ

復習クイズは実施していないが、「自己紹介、名前のつけかた」及び「国旗、国歌、国章」についての中間レポートを課した。

(3) 成績及び評価

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提とした。その上で、中間レポート2種、期末レポート（1. 祝祭日及び年中行事、2. 伝統的な遊び、3. 死後の世界についての比較。この3つのうちの1つを選択）、出席率、授業態度等を考慮して、総合的に判断した。

【評価と課題】

資料のプリント類が毎回、拡充してきているので、解説がより丁寧にできるようになった。今回は、「指を使った数の数え方や縁起のいい数、悪い数」や各国の簡単なあいさつに割く時間が取れなかったのが反省材料である。

今回は欧米系の学生がいなかったのが残念である。 (山中和樹)

<多文化コミュニケーションC（異文化コミュニケーションC）>

【受講生】18名（日本人15名、留学生17名：中国13名、マレーシア3名、ベトナム1名）

【目 標】

グループディスカッションを通して、自分自身の言語活動や文化に対する意識についての気づきを促す。

【教材】教科書は使用しなかった。

【方法】

- ・ 毎回、異なるテーマをとりあげ、グループやペアでディスカッションを行った。取り上げられたテーマは、言語使用に関わるものが中心で、断り、不満の表明などについて、具体的な場面を設定し「自分ならこのような場合にどう言うか・どう書くか、その理由」について内省した後、グループで意見交換を行った。
- ・ 課題作成4つと出席から総合的に評価した。

【評価と課題】

- ・ 受講生が積極的に活動に取り組めるテーマの選択が難しかったが、議論は活発で、受講生からもおおむね好評であった。(桑原陽子)

<応用日本語 I >

【受講生】28名(学部生11名、非正規生17名)

【目標】

日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

【教材】日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント

【方法】

導入として、新聞記事の黙読を行い、大意を把握させた。次に、教師が音読した。それから、学生に1文ずつ、順番に音読させた。その後、新しい文法事項や発音の問題点などを解説し、本文の内容質問等を行った。各回1つの記事を読み切り、次回にその内容に対する試験(記述試験)を実施した。試験については実施の次週に採点返却し、模範解答を配布した。

【評価と課題】

- ・ 成績評価は、実際に電話を使った電話応対試験、期末試験(筆記)、毎回の復習テストを総合評価して行った。1名は出席が最初の数回だったため、受験資格を失った。この1名は学部生である。その他の学生はおおむね出席は良好だった。授業態度も良好だった。学習意欲は例年、非正規生の方が上の印象があるが、今回も同様だった。
- ・ 従来からの課題である、電話応対や名刺交換の現地練習もしたが、今回も人数が多かったので、一人あたりの練習時間をあまりとることができず、細かい指導ができなかった。使用する記事を減らして、その分、実際の会話練習にあてることも検討しなければならない。(山中和樹)

<応用日本語Ⅱ>

【受講生】26名（正規生11名、非正規生15名）

【目 標】最近の代表的なテレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

【教 材】テレビドラマDVD「僕の生きる道」全11話（各45分）

【方 法】1コマで1話を学習する。まず、DVDを見て、ストーリーの概略を把握させる。次に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の感想及び自国との相違に関するレポートを提出させる。レポートは翌週、チェックした上で返却する。

全11話と特別編で12コマを使い、その他のコマをガイダンスや復習に当てた。

【評価と課題】

- ・ 授業態度、毎回のレポート、期末試験より総合的に評価する。おおむね出席率は良好であったが、一部私語が目立つ学生がいたので、嚴重に注意したところ、態度は改まった。
- ・ 本ドラマは高視聴率を記録した人気ドラマで、学生にも好評であった。（山中和樹）

《まとめ》

日本語科目にもそれ以外の科目にも短期プログラム生が混在するクラスがある。

日本語科目のクラスにおいては、次の2つのケースが見受けられた。

- ① 読解に関しては、非漢字圏の学生は、困難を伴う。
- ② 正規学部生の日本語能力はN-2レベルの者が主だが、一方、非正規生（交換留学等の短期留学生）は主にN-1レベルの中国人学生で、両者の差が大きかった。

例年、学習意欲については、全般的に、正規生より非正規生（交換留学生及び短期プログラム生）の方が上だったようだが、今年度について言えば、そのようなことはなかった。

日本語科目以外では、アクティブ・ラーニングの要素も取り入れた授業もあり、非漢字圏の学生が不利になるようなことはあまりなかったと思われる。（山中和樹）

6. 福井大学博士人材キャリア開発支援センター

① 留学生向け日本語学習

- ・ 受講者：留学生研究員（中国 1 名、ベトナム 1 名）日本人研究員 2 名
- ・ 授業時間：2 コマ／週 合計18コマ（10月～12月）
- ・ 担当教員：星摩美
- ・ 単位認定なし

1) 目標

- ・ 博士号（理系）を取得した留学生が日本企業で働く上で必要な日本語力の育成
- ・ 企業の中で自律的に日本語を学んでいく力の育成

2) 教材

主教材『ロールプレイで学ぶビジネス日本語』スリーエーネットワーク

ほか自主作成教材等

3) 授業方法

日本企業文化の理解促進と日本語運用力向上のための活動を日本人研究員とともに協働で行い、対話を通して振り返り、修正を行うことができるよう授業を計画した。

企業文化の理解促進では、文化摩擦を起こした事例から、話し合いを行い、自分自身のスタンスを見出していく活動を行った。

日本語運用力では、ビジネス場面でのEメールのやり取り、電話の会話、状況に合わせた自己紹介、パワーポイントを使った報告発表などを扱った。

4) 評価と課題

ポートフォリオを作成し、目標設定、成果物を収集、評価を行った。一つ一つの活動の中で、参加者が話し合い、評価し合いながら、活動を行ったが、ポートフォリオの中に他者の評価を含めることができなかった。今後はどのような形で他社の評価を含めていくかが課題である。また、今回の受講生は積極的に協働作業に参加し、成果を残すことができたが、受講生によって、協働作業の質や成果が大きく異なる可能性がある。授業参加者に合わせてどのように授業を計画し、協働作業に積極的に関わる仕掛けを作っていくかも課題となる。 (星摩美)